



061号 (2021年6月16日)

目次

日本協同教育学会第17回大会のご案内

「第1回 オンライン講座『日本の協同学習』」開催のご案内

『協同と教育』への投稿募集中
各地の研究会・勉強会

出版情報

ショートレター(会員からの投稿記事)

日本協同教育学会第17回大会のご案内

ご挨拶

前号のニュースレターにて既報の通り、日本協同教育学会第17回大会を2021年10月23日(土)～24日(日)に開催します。本学会初のオンライン開催となります。

昨年度は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により、全国大会の開催を断念せざるを得ませんでした。この間、会員の皆様はオンラインによる講義、研修、研究会等々に参加したり、あるいは主催したりする経験を重ねてこられたことと思います。また、ICT機器の活用に習熟し、オンライン上で思いを伝え、互いを理解し、高め合う経験を重ねてこられたことと思います。対面の良さは拭いがたくあ

りますが、移動を伴わず遠隔から参加できる等、オンラインのメリットを実感してこられたのではないのでしょうか。

その一方、学校現場では、感染症対策を万全に施しつつ日々の教育活動に取り組んでおられます。その膨大な負荷とともに、「グループ学習はもとより、ペアワーク等でわずかに話し合わせることでさえ控えざるを得なくなった」という声も多く聞かれます。さらに、実際に休校措置をとらざるをえなくなったとき、学校と子どもたちをオンラインで結び、いかに対面に代わる授業を展開し得るかについても、様々な試行錯誤が重ねられています。

コロナ禍にあって、小中学校での新学習指導要領完全実施、GIGAスクール構想の前倒し、かつ中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」が出されたことは非常に象徴的です。答申の副題は「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」です。答申が求めることに対して、私たちは協同の理念で向き合い、その是非を問いつける必要があります。

協同学習は形ではなく、自立・自律した学習者を育てる理論であり実践技法です。「コロナ禍故にグループ学習

が実践しにくくなった」と捉えてはいけません。「コロナ禍」というハンデ故に、いかにして自立・自律した学習者を育てることが可能かを問う、協同の理念に立ち返った発想の転換が必要なのです。10月23日(土)・24日(日)の本大会では、研究発表・実践報告・ラウンドテーブル・ワークショップ等を開催します。また2日目の午前には、「『令和の日本型学校教育』と協同教育」というテーマのシンポジウムを開催します。多くの皆様のご参加とご発表をお待ちしております。

なお、学会HPの年次大会のページ(<https://jasce.jp/conf.php>)に詳細なスケジュール及び参加申込方法等を掲載しております。何卒ご確認頂き、ふるってご参加頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

日本協同教育学会第17回大会
大会実行委員長：高旗浩志
(岡山大学)

「第1回 オンライン講座『日本の協同学習』」開催のご案内

皆さま、2020年度は、全3回の「オンライン協同学習カフェ」に多数ご参加いただき、ありがとうございました。今年度も、どうぞよろしくお願いいたします。

JASCE

さて、今年度より、カフェに加え、オンライン講座『日本の協同学習』を開催いたします。

2019年に会員の皆さまに配本した『日本の協同学習』をテキストとして、学び合う機会を提供したいと考えたからです。もちろん、テキストをご準備いただければ、未会員の皆さまの参加も大歓迎です。

第1回は、第13章(日本協同教育学会15年の歩み)です。皆さまの参加をお待ちしております。



各地の研究会・勉強会

(大阪地域)

協同学習を用いた看護教育研究会

◇5月16日(日)13:00~16:00
オンラインでの開催に32名の方が参加(沖縄・関西・中部・関東)されました。II部形式で開催し、I部は「オンライン授業で見出した工夫や解決したい課題」、II部は「ルーブリック評価」について、グループディスカッションと全体共有をしました。

オンライン授業も2年目に入り学生も教員も随分慣れてきました。オンライン授業が続き「学生がグループ学習を好むようになり人とつながりたがる」といった変化や、「課題学習を動画作成で提出を求め理解を確認したが効果的だった」「ブレイクアウトルームの

学習活動の評価方法」など、具体的な工夫例や課題解決案などについて意見交換しました。

ルーブリック評価については、前回の石田裕久先生の勉強会を振り返り、関田一彦先生のご著書『教育評価との付き合い方』も学び、科目や臨地実習におけるルーブリック評価について意見交換しました。診断的評価、形成的評価、総括的評価への取り組み、学生と共有し納得し合うための工夫、コロナ禍により異なった実習環境下(学内と臨地)で学習した場合の評価方法など、有意義な意見交換となりました。中でも高い関心を集めたのは、西野毅朗先生による京

第1回 オンライン講座『日本の協同学習』

□ 2021年6月26日(土) 14時開会

□ 第13章(日本協同教育学会15年の歩み)

話題提供:久保田秀明(創価大学)

須藤 文(久留米大学)

日本協同教育学会HPから申し込み
(6/19 24時締切)

学会員でなくても参加可、参加費無料

申込サイトに詳しい説明資料あり

『協同と教育』への投稿募集中

『協同と教育』第17号への投稿を随時受け付けています。投稿受理から査読を経て採択が決定されるまでに通常数ヶ月以上を要します。みなさまの積極的な投稿をお待ちしております。



JASCE

都橋大学看護学科の「ポリシーに基づく縦断的統合型科目ルーブリック」の紹介でした。看護教育では看護学実習の評価内容・方法が専門分野毎に異なっているのが通例ですが、京都橋大学ではディプロマポリシーに基づく全分野共通の実習評価表(ルーブリック)を用い4年かけて到達させていくというもので、その具体例と論文を紹介していただきました。評価の配点も学年毎に工夫されており、規準・基準以外に自由記述欄を設け学生の意見を反映させるなど、何よりも「学生が将来に亘って自己評価能力を高めていける」上で有益で、「目から鱗」の発想の転換につながるご紹介に大いに刺激をいただきました。

今回は7月24日(土)13:30~開催予定です。ご参加をお待ちしております。

連絡先: 緒方巧(梅花女子大学
t-ogata@baika.ac.jp)

きょう探研(きょうどう探究型授業づくり研究会)

◇次回(第3回)の研究会〔きょう探研〕は、7月23日(金)15時~18時に開催予定です。

前回(3月21日)は対面での研修会を行い、参加者の皆様からは大変充実した時間であったと好評をいただきました。今後の研修会にぜひ参加をしたいという声も多数いただきました。しかし遠方のため参加がむづかしいという方もいらっしゃいます。そこで、次

回の研修会はオンラインで行いたいと思います。

今回は西口利文先生(大阪産業大学)の話を中心テーマとして、参加者(ともに感じ考える共同者)相互での「対話」を中心に進めたいと思います。参加者同士で「対話」を深め、考えを高め合える機会になればいいと思います。参加をご希望の方は、下記までご連絡ください。(当日参加の場合は下記のZOOMのIDやパスコードで、開始時間5分前にご入室ください。当日の参加も可能ですが、なるべく事前にお知らせいただくとありがたいです。)

Zoomミーティング

『令和3年 第3回 きょう探研』

時間:2021年7月23日

15時~18時

ミーティングID:881 1699 2134

パスコード:877024

連絡先: 中村哲也(常磐会学園大学 nani7272@yahoo.co.jp)

(岡山・中国方面)

協同学習研究会

◇2012年2月に発足した、30~40名定員のこぢんまりとした学習会です。毎回、おひとりにビデオによる授業公開をして頂き、グループワークを通して協同学習の理論と実践への理解を深めています。発足当初は高等

学校の先生に多くご参加頂いていましたが、最近では小学校、中学校の先生のご参加も増えつつあります。また岡山県外からの参加者も増えています。今年度は当面、オンライン開催とし、次の日程で行います。いずれも土曜日の14時~17時30分です。

第1回:2021年6月12日「学習する集団」を育む授業づくり
高旗浩志(岡山大学教師教育開発センター)……終了

第2回:2021年8月28日 ICTと協同学習の実践事例(仮)
瀬田幸一郎先生(岡山県立林野高等学校教諭)

第3回:2021年12月4日(内容未定)

第4回:2022年3月5日(内容未定)

参加を希望される方は、事前に高旗までメールでご照会ください。また、第3回、第4回、並びに次年度以降の発表希望の申込みも受け付けています。

連絡先: 高旗浩志(岡山大学教師教育開発センター
takahata@okayama-u.ac.jp)

(九州地域)

協同教育研究会(旧・授業づくり研究会)

九州地区で展開してきました研究会は転換期を迎えています。これまでは「授業づくり」を中心とした研究会でしたが、より理論的な内容も取り上

JASCE

げたいという思いから、名称を「協同教育研究会」に変えました。そして本研究会のもとに「協同ゼミ」と称した部会を必要に応じて設けることにしました。今回は協同ゼミ「社会的構成主義」と協同ゼミ「授業づくり」について報告します。

◇協同ゼミ「社会的構成主義」(通称・ガーゲン研究会)

本ゼミの目的はガーゲンの社会的構成主義を理解し、各自の研究や実践のさらなる展開をめざすことです。ガーゲン(2020)「関係からはじまる」(ナカニシヤ出版)をテキストにしています。これまでの活動と今後の予定は次の通りです。詳細については協同教育研究所「結風」のHPをご覧ください。

第1回 1月23日(土) 15:00～16:30 はじめに

第2回 3月27日(土) 15:00～16:30 第1章「境界画的な存在からなる世界」

第3回 5月29日(土) 15:00～17:00 第2章「関係こそすべての始まり」

第4回 7月31日(土) 15:00～17:00 第7章「知の共同生成」

第5回 9月25日(土) 15:00～17:00 第8章「関係こそが教育のカギ」

第6回 11月27日(土) 15:00～17:00 未定

◇協同ゼミ「授業づくり」開催予定
これまでの「授業づくり研究会」と

同じ内容と形式のゼミです。現時点では日程「8月28日(土)午後」のみ決定しています。詳細は決定次第、協同教育研究所「結風」の

HPやメールリストでお知らせします。

連絡先:安永悟(久留米大学
yasunaga_satoru@kurume-u.ac.jp)

● 出版情報 ●

20日間でできる 学び合いスキル30の算数指導

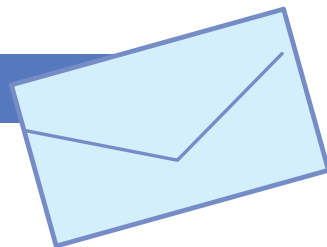


学び合いの算数授業づくりに取り組んでいる石川県、広島県、愛知県、栃木県の小学校での授業実践をもとに、主体的・対話的な学びを進める子どもの姿から子どもに習得させたい学び合いスキル30をリスト化しました。算数授業展開の場面ごとに30のスキルを育てるための教師の働きかけや学び合い指導の年間指導計画も分かりやすく解説しています。本書は2日間単位で1か月を目安に学び合いスキルを指導できる手引書として役立ちます。石田淳一 編著。東洋館出版社。

米国における協働的な学習の理論的・実践的系譜



協同学習と進歩主義教育の関係から始まる協同学習の成立・展開過程、現在に至るまでの協同学習の泰斗、ジョンソン、ケーガン、スレイヴィンらの理論的系譜が、豊富な学術資料と確かな論述に基づいてみごとに展開されています。この理論的展開のなかで、学習科学の諸理論を分析枠として提示し、その協同学習との関係が論じられていることから、協同学習の歴史書ではなく、現在の協同学習の理論・実践の定点を確かめるためにも欠かすべからざる一書になることが見込まれます。福岡祐貴 著。東信堂。



道徳の授業と協同学習

道徳の授業には、その進め方に特別な了解でもあるのでしょうか。道徳だけ、一昔前にタイムスリップしたような実践が多いのです。子どもたちの交流機会は設けていても、教師の指示による短時間のものであり、子どもの意欲的な学びに出会うことはまずありません。話し合いは淡々としており、話し合いを通して子どもたちが新しい世界に踏み込む様子に出会えることもまずありません。

協同学習の視点から、子どもたち主体で道徳性を高めていくための授業改善に向けた、いくつかの提言ができればと思います。

まず「教師が示すべきは、教える内容ではなく、子どもの気づきの手掛かりである」という認識の必要性です。教科書の内容の読み取りが大事ではなく、それを手掛かりに、大事な道徳的価値に気づくことが、そこでの学びです。教材の正確な読み取りは要らないとも言えます。

「導入時に、本時の学習の値打ちを知らせる」ことも必要です。例えば、「責任」を題材にした読み物を教材にした折、「責任」は、今皆が謳歌している「自由」を守るために欠かせない行動だという視点を、子どもの発達に応じた形で説明するなどの工夫が必要でしょう。「責任って大事そうだね」といった認識が出発点では、真剣な話し合いは期待できません。

教師のファシリテート（発問で導いていく手法）は望ましい進め方かどうか、教師と生徒の問答が必要か、という疑問も感じます。教師の発問に応える者は一部に偏ります。前は向いていても、思考面ではただ乗りの者も多くいます。いかに問答を減らすかという授業づくりを望みます。

「本当に子どもの心に落ちる働きかけができていくか」という観点も欲しいです。研究授業後の振り返りの協議で、だれだれの発表がよかったというやりとりを聞くことは多いのですが、本当にその子の心に落ちた発言だったのでしょうか。私には、発言しなかった他の子どもの内面の変化の方が気になります。目には見えない、しかし心を配れば推察はできる子どもの深い変化こそ、期待すべきゴールだと思うのです。

「テキストの範読」は必要でしょうか。教科書を読み取れない子どものためにという理由づけを聞いたことがあります。読み間違えてはいけないのですか。誤読は仲間との意見交換で自ずから気づいていきます。範読は、一つひとつ確認して進めるという教師主導性が、そこにすでに前提としてあるのです。せつかくの読解の機会を生かすべきです。個別に読み取る方が、個々の学習ペースが保証でき、よりの確に内容が理解できるはず。道徳はまた、学んだ成果が日ごろ

の言動に反映されていくことまで期待すべきでしょう。授業の間だけは健全な思考をするけれど、日常生活に反映されていかないことに疑問を持つべきです。本気で学んだことならば、徐々にでも、言動に気を付ける、または言動が自ずから変わるはず。授業を終えた教師はそこまでの変化を期待すべきでしょう。それがなければ、子どももその場限りの経験としてしまい、生活への定着は見込めません。バズ学習の実践では、帰りの会での生活面の振り返りをとても大切にしている実践がありました。道徳での真剣な学びを、折に触れて帰りの会の振り返りで取り上げるといった工夫は効果があるように思います。

道徳も課題解決をめざす学習活動です。効果的な進め方の原理は教科の学習と同じです。道徳性は社会における価値につながる内容ですから、仲間との意見交換は欠かせません。「発達最近接領域」の理論、すなわち、本人にとって近い水準の情報ほど成長の糧として取り入れられやすいという理論からは、道徳性発達において近い仲間、すなわち学級の仲間の意見が大きな影響を持つと考えられるのです。協同的な学習集団での高め合いを基盤とした授業づくりが、進め方の選択肢として望ましいと考えられるのです。

(中京大学名誉教授 杉江修治)